

## 1. 研究目的

対照研究は、その成果を外国語教育にどのような段階で応用するかによってその方法が違ってくる。筆者は「単語と単語の組み合わせ」の法則の観点から、日本語と中国語の違いを研究対象としている。日本語の「国を 出る」は、中国語の「出 国」に対応しているのに、なぜ「田舎を 出る」は中国語では「出 郷下」ではなく「離開 郷下」で表されるのか、というような疑問を持つのは筆者だけだろうか？ これが筆者が、日本語と中国語の「単語と単語の組み合わせ」法則の違いを明らかにしようとする理由である。この研究の結果が日本語の学習者に日本語の名詞と動詞の関係、そして、「格助詞」の役割を理解する助けになってほしいと思う。本稿では“「移動動詞」（以下「VM」で示す）と「空間名詞」（以下「NL」で示す）の組み合わせ”について報告したい。

## 2. 研究方法及び先行研究

周知の通り、日本語の「名詞+動詞」の結びつき（表1）には、名詞と動詞のそれぞれの語彙文法的な意味のほか、名詞に伴う格助詞の問題もある。一方、中国語の「動詞+名詞」の文法関係はその両者の語順（配置）によって決まる。このような違いのある日本語と中国語における対照研究の方法として、筆者は言語学研究会編1983（『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房 以下『連語論』と称する）によって、それぞれの言語における「単語と単語の組み合わせ」の＜意味関係＞を究明した。筆者はまず、『連語論』的立場から中国語の「移動動詞」（参照（表2））と「空間名詞」（参照（表3））との結合関係（表4）を体系的にとらえようとした<sup>1)</sup>。そして、それをさらに『連語論』で明らかにされている日本語の＜空間名詞と移動動詞との組み合わせ＞と比較した。その結果、日中両言語の「移動動詞+空間名詞」の意味関係（参照（表5））の違いを明らかにすることができた。さらに、中国語の「VM」の「NL」に対する結合能力の違いを考察することによって、中国語の「移動動作」の表わしかたや「空間名詞」の意味が、日本語とどう違うかも明確になった。なお、中国語の「移動動詞」と「場所名詞」との結合関係の用例は『中日大辞典』からとり、日中対照分析の言語資料については、主に日中文学対訳作品の用例を使用した。

## 3. 日本語の「NL+VM」の連語について

『連語論』における＜「場所名詞」と「移動動詞」との関係＞をまとめて見ると（表1）のような五つのタイプになる。移動動詞と組み合わせる空間名詞の格は「に格、へ格、まで格、を格、から格」であるが、「移動動詞」は次の四つのタイプに分類されている。以下『連語論』から引用する。（VM1、2、3のような区別は筆者が付けたものである）

VM1は「いく、くる、もどる、のぼる、あがる、おりる、くだる、まわる、すすむ、まがる、むかう」などの方向性を示す移動動詞である。

VM2は「あるく、はしる、はう、かける、およぐ、とぶ、すべる、つたう、たどる」などの様態性の移動動詞である。

VM3は「とおる、わたる、越える、ぬける、過ぎる、経る」のような通過動詞である。

VM4は「出る、たつ、さる、とおざかる、離れる、退く」などのような出発動詞である。

(表1)

結合関係	かざりNL	かざられ VM
<動作と目的地との関係> 例:	空間名詞に/へ 田舎に	方向性移動動詞 VM1 行く (中訳: 去 郷下) <small>qù xiāng xià</small>
<動作と到達範囲との関係> 例:	空間名詞まで 田舎まで 田舎まで	移動動詞 VM1/VM2 (田舎 行く) 行く (中訳: 到 郷下) 歩く (中訳: 走到 郷下) <small>diào xiāng xià</small> <small>zoudiào xiāng xià</small>
<動作と移動場所との関係> 例:	空間名詞を 田舎を 道を	移動動詞 VM1/VM2 行く (中訳: 走在 郷下) 歩く (中訳: 走 路) <small>zouzai xiāng xià</small> <small>zou lù</small>
<動作と通過点との関係> 例:	空間名詞を 田舎を	通過動詞 VM3 とおる (中訳: 經過 郷下) <small>jīngguò xiāng xià</small>
<動作と離れる場所との関係> 例:	空間名詞を/から 田舎を/から	出発動詞 VM4 出る (中訳: 離開 郷下) <small>rì kai xiāng xià</small>

#### 4. 中国語にみられる「VM+NL」の連語

中国語の「VM+NL」の結びつきについては本稿では(表4)の通り、三つのタイプに分類した。さらに、そのタイプを分類するに当たってかざられになる「VM」のタイプを(表2)のように、また、そのかざりになる「NL」のタイプも(表3)のようにに分類した。

##### 4. 1. 中国語の「VM」の分類について(表2)

<b>A. 方向性の移動動詞</b>
a. 到着性の移動動詞 (VM1) “去、来、到、回、上、下、出”等「目的地に向う移動動詞」
b. 離去性の移動動詞 (VM3) “下、離開”。「離去動作動詞」を表す。
c. 出発性の移動動詞 (VM4) “出”。
<b>B. 方向性をもたない移動動詞 (様態性の移動動詞)</b>
“上、下、爬、走、逛、跑、過” (VM2) 「移動の動作=プロセス動詞」を表す。

##### 4. 2. 中国語の「NL」の分類について<sup>2)</sup>(表3)

筆者は中国語の「NL」を移動動詞との関係のなかでとらえ、以下(表3)のように8つに下位分類した。

NL1 場所名詞	(東京、日本、台北、台南等) これらの名詞は“移動の目的地としての方位詞の付かない名詞”という共通点を持つため「場所名詞」とする。
----------	----------------------------------------------------------------------

NL2地点名詞	(図書館、建築物、大楼、病院、学校等) これら名詞は“動作の目的地の場所にもなるが、NL1の名詞と違って、方位詞を伴うこともある”から、「地点名詞」と名付けて類別する。
NL3道路性名詞	(路、小路、大路、砂路、柏油路等) これら“移動するための道路性空間”という共通点を持つ名詞を「道路性名詞」と名付けた。
NL4斜面途径名詞	(山、坂、斜面、楼梯(階段)、電梯等) これら“斜めの道路性空間”という共通点を持つ名詞を「斜面途径名詞」と名付けた。
NL5横断面名詞	(馬路、橋、河、海、天橋、斑馬線等) これら“横断するためのところ”という共通点を持つ名詞を「横断面名詞」と名付けた。
NL6低窪地名詞	(田、井、海、地、壕溝、地洞(洞穴)等) これら“主体の立地点より低い位置にあるところ”という共通点を持つ名詞を「低窪地名詞」と名付けた。
NL7高起面名詞	(台、床、馬、車、飛機等) これら“主体の立地点より高い位置にあるもの”という共通点を持つ名詞を「高起面名詞」と名付けた。
NL8境内外界線名詞	(門、城、国、境、獄、籠、窖(穴)等) これらの“入り口又境のような空間”という共通点を持つ名詞を「境内外界線名詞」と名付けた。

#### 4.3. 中国語の「VM+NL」連語(表4)

「VM」+「NL」の結合関係	かざられ	かざり
<動作と目的地との関係>	「目的地に向う移動動詞」(VM1)	「空間性名詞」(NL)
	去、来/到、回	「日本、台北」(NL1/2)
	下 <sup>3)</sup>	「田、井、海、地」(NL6)
	上	「台、床、馬、車」(NL7)
<動作と移動場所との関係>	「移動動作の様態性動詞」(VM2)	「空間性名詞」(NL)
	下/上/ 爬	「山、楼梯、斜坡」(NL4)
	走/跑	「路、山路、道路」(NL3)
	逛	「街、公園、市場」(NL2)
	過 <sup>4)</sup>	「橋、馬路、隧道」(NL5)
<動作と離れる場所との関係>	「離れる動作動詞」(VM3/4)	「場所名詞」(NL)
	出 <sup>5)</sup>	「門、城、国、獄」(NL8)
	離開 <sup>6)</sup>	「日本、台北」(NL1)
	下	「台、馬、車」(NL7)

<動作と目的地との関係>は「VM1」類の動詞“来、去、回、到、上、下”と「NL1/2、6、7」類の名詞が組み合わさった結びつきで、<動作と移動場所との関係>は「VM2」類の動詞“上、下、爬、走、跑、過”と「NL4、3、2、5」の名詞が組み合わさった結びつきである。そして、<動作と離れる場所との関係>は「VM3、4」の動詞と「NL8、1、7」の名詞が組み合わさったものである。

現代中国語では、移動動詞は一般に日本語と同じように分類されている。つまり、移動動詞を「方

向性の移動動詞)：“出、去、来、回、上、下、進、過、起、開”と「動作性の移動動詞)：“走、跑、爬、飛、滾、流”(LI and THOMPSON: 1983ではこれを「移位動詞」としている。)とに分けている。しかし、このような分類で中国語の移動動詞と空間名詞の関係を見るのは難しい。例えば、現代中国語でいう「方向性移動動詞」の中の「上、下、過」は、筆者が分類した「NL3、4、5」のタイプの名詞と組み合わせれば、本来方向性の移動動詞でも、動作を表すことができるし、また、「下」が「NL7」の名詞と、そして「出」が「NL8」の名詞と組み合わせれば、その名詞は<動作と離れる場所との関係>を表すことができるからである。

しかし以上に述べたように、例えば筆者が「NL」との組み合わせの違いから区別した中国語の「VM1」と「VM2」タイプ動詞のつくる関係を考えると、「VM1」(“来、去、回、到、上、下、”)タイプをつくる関係は日本語の「VMに、へ+NL」(<動作と目的地との関係>)に対応し、「VM2」(“上、下、爬、過”)タイプをつくる関係は日本語の「NLを+VM」(<動作と移動場所との関係>)に対応するようになる。

## 5. 中国語の「VM+NL」と日本語の「NL+VM」の対応関係

本稿では、連語論の方法論にしたがって日本語の「NL+VM」と中国語の「VM+NL」の対応関係を考察した。その結果、日本語の「NL+VM」の組み合わせにおいては、五つのタイプがあるのに対して、中国語の「VM+NL」の意味関係は三つだけであることを確認することができた。その対応関係を(表5)に示すと次の通りになる。

(表5)

中国語	日本語
<動作と予想地、目的地の的関係> VM1 NL 1、2/NL6 例：去 東京 例：下 井  例：到 東京	<動作と目的地との関係> NLに/へ VM1  例：田舎に行く 例：田舎へ行く
	<動作と到達範囲との関係>NLまで VM1 例：田舎まで行く
<動作と移動場所との関係> VM2 NL3/NL4/NL5 例：下/上/爬 楼梯 例：過 馬路	<動作と移動場所との関係> NLを VM1/2  例：田舎を行く
	<動作と通過地との関係>NLを VM3 例：田舎をとおる
<動作と離れる場所との関係> VM3 NL8/NL1、2/NL7 例：出国 例：離開 日本 例：下車	<動作と離れる場所との関係> NLを/から VM4  例：田舎を/から離れる 例：山を/から下りる 例：国を/から出る

## 5. 1. 中国語の「VM+NL」と日本語の「NL+VM」の相違点

「VM」＋「NL」における日中両言語の〈結びつき〉の対応関係を考察した結果、日本語の「NL＋VM」の組み合わせは五つの意味タイプになるに対し、中国語の「VM＋NL」の意味関係は三つだけであることが分かった。

その原因の一つは、日本語の〈動作と目的地との関係〉では動詞と組み合わさった名詞に“に／へ”がつき、〈動作と到達範囲との関係〉では名詞に“まで”がつくことによって、両者が区別されているが、中国語では〈動作と予想地、目的地との関係〉一つだけで示されていることである。“まで格”によってつくられる日本語の〈動作と到達範囲との関係〉は中国語の「到」のつくる関係に当たる(例1)ようにみえる。しかし、「到」のつくる関係は“まで”によって表される関係とは違う。中国語の「到」は“到着を想定した動作”であるが、日本語の“まで”で示される「NL＋VM」の関係は〈動作と到達範囲との関係〉である。そのため、本論では中国語の「到」と名詞の関係は〈動作と到達範囲との関係〉ではなく〈動作と予想地、目的地との関係〉に分類しているのである。

ところで日本語の〈動作と目的地との関係〉の「NLへ 出る」に対応する中国語では「去 NL」(例2)と「到 NL」(例3)がある。しかし、中国語の「去」は“目的地に向かって移動する動作”で、「到」は“到着を想定した動作”である。一方、「NLへ 出る」の関係は“目的地への到着”を意味する。だが、「到 NL」で示される場合でも「去 NL」で示される場合でもそれだけでは日本語の「NLへ 出る」の意味を完全に言い表すことはできない。そのため、「NLへ 出る」は中国語の「去 NL」になったり、「到 NL」になったりするようになる。「到」は「了」を付けなければ“動作の達成”を表すことができない。すなわち、限界性のある動詞であろう。一方、「去」もいくら「去」という動作を行っても目的地につかず、また、「了」を付けても“動作の実現”しか表すことができない。要するに非限界性のタイプの動詞である。「到」と「去」の限界性の問題に関してはさらに検討の余地があるが、本稿では割愛する。

以上にみられるように、日本語の「Nへ 出る」は“目的地に向かって移動する”から“目的地に到着する”までの段階を含んでいる。しかし、中国語においてはそうではない。日本語の一つの動詞によって表されている意味が、中国語では二つの動作に分割して表されることになる。なお、日本語の〈動作と到達範囲との関係〉で表されている意味を中国語で表現する場合、「VM」が到着の結果を表す補助動詞「一到」(ex. 「來到／走到 NL」)を伴った形をとることが必要である。

例1：わざわざ踏み切りまで見送りに来た…。『みかん』

特意到道口来送行… 対訳

例2：信州へ出るのには…。『入れ札』

去信州，這…。 対訳

例3：山の頂上へ出た。『伊豆の踊り子』

到了山頂， 対訳

例4：とうとう峠のトンネルまできてしまった。『伊豆の踊り子』

終於來到了山嶺的隧道了。 対訳

そして、もう一つの原因は、日本語の〈動作と通過地との関係〉に対応する結びつきが中国語の「VM+NL」の組み合わせに存在しないことである。日本語の〈動作と通過地との関係〉で表されている通過動詞と場所名詞との関係には、中国語にはない結果性が含まれている。〈動作と通過地との関係〉に当たる結びつきを中国語で表現しようとしたとき、動詞「過」を用いるが、「過」は一部の日本語の通過動詞（「とおる、わたる」）に当たるが、これらと違って「過」は動作のプロセスのみを表す。そのため、本論では中国語の「過」と名詞の関係は〈動作と通過地との関係〉ではなく、〈動作と移動場所との関係〉に入れているのである。以上から同じ「VM」+「NL」の表現において、中国語の方が日本語より表現される意味タイプが少ない原因は動詞に含まれている結果性<sup>7)</sup>の違いであることが知られる。

## 5. 2. 日本語と中国語の「VM」と「NL」の結合能力の相違点

名詞と動詞の結びつきにおいて、日本語の場合は主に「名詞の格」によって文法的な意味が表し分けられているのに対し、中国語の場合は特定の下位的なカテゴリー<sup>8)</sup>の名詞との結びつきによって表現されている。例えば、日本語の「国を 出る」は、中国語の「出 国」に対応しているが、「田舎を 出る」は中国語の「出 郷下」ではなく「離開 郷下」で表される。日本語では「出る」という動詞は「国を」、「田舎を」と組み合わせるが、同じような語彙的な意味の動詞の中国語の「出」は「国」と組み合わせなくても、「郷下」とは組み合わせられない。中国語の「出」は日本語とは違って制限された意味の名詞としか結び付かないのである。

中国語の「出」は、「門、城、国」のような名詞と組み合わせるが、「東京、郷下」のような名詞とは組み合わせられない。逆に、「離開」は「東京、台湾」のような名詞と組み合わせるが、「門、城、国」のような名詞とは組み合わせられない。中国語の「出」はある範囲或いは境界の中から出て行くという動作で、それと組み合わせるのは、ある範囲、入り口或いは境界を示すものでなければならないからである。一方、「離開」はある場所から離れていくという動作で、それと組み合わせるのは、施設、都市、国名のような「NL1、2」名詞でなければならない。「出」が“門、城、国、境、牢”のような場所「境内外界線名詞NL 8」と組み合わせると〈動作と離れる場所との関係〉を表すことができる。一方、日本語では、動詞を限定する名詞の格がその結びつきに影響を与えている。「出る」に「を格の名詞」が組み合わせると、その名詞は“動作のはなれるところ”という意味を表すことができ、「に格／へ格の名詞」の場合は、その名詞は“目的、到着の場所”を表すことができる。また、「まで格の名詞」は“動作の移動の範囲”を示すことになる。

日本語では名詞と動詞と組み合わせは格の存在により、文法的な意味が明確になっていることが多い。格助詞のような形式がないためであろうか、同じ結びつきを作る場合でも、中国語の方が日本語以上に特定の意味の名詞が要求され、場所名詞という大きなカテゴリーだけで、中国語の結びつきの違いを説明することは難しく場所名詞を下位的なカテゴリーに分けて考えることが必要である。

日本語の「NLを+VM」（「東京を 出る」）は、中国語の「VM+NL」（「離開 東京」）に対応し、語彙的には異なった単語によって表現されている。同じ動詞と名詞の組み合わせのようにみえても、中国語の動詞は日本語と比較して、より限定的なカテゴリーの名詞を要求する。このようにかざる単語とかざられる単語との間の関係をきちんとみることは、言語研究にだけでなく、日本語教育におい

でも中国語教育においても大きな助けになるであろう。

中国語の名詞と動詞の意味関係を明らかにすることによって、異なった「格の名詞」で表現されている日本語との対応関係を明らかにすることができた。このことによって、なぜ同じタイプの動詞（例“出”と“離開”）であるのに異なった名詞を要求するか、また、「NL に出る」がなぜ「出 NL」ではなく「到 NL」に当たるのかについての説明も可能になった。

## 注

- 1) 中国語に関しては、ヤーホントフ (1957)、朱徳熙 (1982)、湯廷池 (1987)、李臨定 (1990)、相原茂 (1997) などが中国語の動詞と名詞の関係の体系をとらえようとしているが、幾つかのタイプの列挙に止まっている。中国語の「動詞」と「名詞」との間の意味関係は未だに十分に整理されていない中、筆者は中国語の「移動動詞」と「場所名詞」との関係を『連語論』的な見地から整理した。
- 2) 現代中国語では「NL」を「処所詞」(朱徳熙1982) 或いは「地方詞」(趙元任1980) と呼ぶ。これらの「処所詞」という術語は発話や答える時の状況により分類したもので、「場所性」があることを明らかにしている点で、一定の意義があるが、しかし、単語の意味のカテゴリ-的側面 (カテゴリカルな意味) を必ずしも十分にとらえているとはいえない。筆者の名付ける「空間名詞」とは移動動詞と結びついた時、その名詞が動作の〈場所〉として成り立つものである。例えば「学校」という名詞は「造る」と結びついた時〈建物〉というカテゴリ-であるが、「行く」と結びついた場合到着の〈場所〉になる (宮島1996 p32)。トコロ性の問題については荒川1984、1985、1992など一連の考察に詳しいので参照されたい。なお、本稿では、方位詞が付く「場所詞組」については、言及しない。また「移動動詞」については、主に一音節の単純動詞のみを取上げる。
- 3) 「下」について、ヤーホントフ1957、荒川1984などの先行研究がある。ヤーホントフは「運動の出発点を表わすこともできるが、終着点も意味することができる。」という。一方、荒川1984は「下」は「行く先」と「起点」の両方の対象をとるという。これらの先行研究を踏まえて、筆者は「下」を「出発点」「終着点」と「移動のプロセス」の三つの対象をとるものと分類している。
- 4) 中国語の“調、渡”も「過」と似た性質がある。「翻 (越える、乗り越える)」は、「山、壁 (囲い、城壁)」としか結び付かず、「渡」は「河、海」という場所名詞としか直接に結び付かない。“翻、渡”は慣用的な可能性がある。
- 5) 「出」と組み合わせる「海、洋、台、場、庭等」の名詞は〈動作と目的地との関係〉を作るタイプになる。だが、これらの名詞と動詞との関係は直接にしか結び付かないため、慣用的な組み合わせの可能性がある。さらに、「出海、出台、出庭」などは、拡大して「出海捕魚、出台演唱、出庭作証」のようにいうことができる。これらの場合においては、それぞれの場所で行われる動作が明示されることになるが、このように拡大された組み合わせでなくとも、この種の動作を指し示す意味は含みとして存在している。
- 6) 中国語の「離開」は、二音節の単純動詞とされている。この場合における「離」は「走開、推開」のような「動詞+補助動詞」のタイプと違って、常に「開」を伴わなければならない。「離」と「開」が単独で使われると意味が変わるので、複合的な単純動詞だとみられる。なお、「離」は「離京、離境」という用法があったが、現代語ではあまり使われていないようである。
- 7) 「結果性は、より一般化にしていえば、動詞の意味のあらかず、現象の段階の一部である。(中略) 動詞は動作を任意の段階にくぎることができるはずだから、ちょっとみたところでは、おなじようにみえる動詞でも、言語によってちがった段階までをふくんでいる、ということがある。」と宮島(1994: 418)が指摘しているように、結果性の問題

は文法的な問題である。

8)「カテゴリーカルな意味というのは文法的な結びつきとの関わりにおける語彙的な意味の一般化である。」と規定されている。(奥田靖雄1985: 162抜粋)。

## 参考文献

- 相原茂 (1997) 『謎解き中国語の文法』 講談社現代新書
- 荒川清秀 (1984) 「中国語の場所語・場所表現」 『愛知大学外国語研究室報』 第8号
- (1985) 「動作(3)とトコロ(場所)」 『中国語』 9、16-18大修館
- (1992) 「日本語名詞のトコロ(場所)性—中国語との関連で—」 『日本語と中国語の対照研究 論文集(上)』 71-94くろしお出版
- (1996) 「日本語と中国語の移動動詞」 『愛知大学外語研紀要』 第22号9-23
- 池上嘉彦 (1993) 「<移動>のスキーマと<行為>のスキーマ—日本語の「ヲ格+移動動詞」構造の類型論的考察—」 『東  
京大学教養学部外国語科研究紀要』 41-3
- 奥田靖雄 (1985) 『ことばの研究・序説』 むぎ書房
- 言語学研究会編 (1983) 『日本語文法・連語論(資料編)』 むぎ書房
- 鈴木重幸 (1996) 『形態論・序説』 むぎ書房
- 鈴木康之 (1994) 「現代日本語の名詞的な連語の研究」 日本語文法研究会 編集・発行
- 松本泰丈編 (1985) 「連語の記述をめぐって」 『国文学 解釈と鑑賞』 3月号至文堂
- 宮島達夫 (1994) 『語彙論研究』 むぎ書房
- (1996) 「カテゴリー的多義性」 『日本文法の諸問題』 29-52 ひつじ書房
- C. E. ヤーホントフ (1957) 『中国語動詞の研究』 橋本萬太郎 1987 訳 白帝社
- 朱徳熙 (1982) 『語法講義』 商務印書館
- 趙元任 (1980) 『中国語の文法』 中文大学出版社
- 湯廷池 (1987) 『漢語詞法句續集』 台湾書局
- 方美麗 (1997) 「<物名詞を+他動詞>の連語と対応する中国語の表現」 『国文学 解釈と鑑賞』 7月号 33-41 至文堂
- (1997) 「物に対する働きかけを表わす連語～日中文法対照研究～」 お茶の水女子大学博士論文(未公開)
- (1999) 「カテゴリーカルな意味～日中文法対照研究～」 『国文学 解釈と鑑賞』 1月号 73-84 至文堂
- 孟慶海 (1986) 「動詞+処所賓語」 中国語文 第四期
- LI and THOMPSON (1983) 『漢語語法』 (黄萱範訳) 文鶴出版・台北
- 李臨定 (1990) 『現代漢語動詞』 中国語社会科学出版社
- 呂叔湘 (1957) 『中国語語法分析問題』 光生館
- 馬慶株 (1995) 「時量賓語和動詞的類」 『中国語文』 1995第五期 86-90
- 沈家宣 (1995) 「“有界”与“無界”」 『中国語文』 1995第五期 367-379

## 付記

本稿は1999年10月に日本語文法研究会の研究発表及び2000年6月にシンガポールでの ICCL-9 Center for Advanced Studies Faculty of Arts & Social Sciences National University of Singapore において口頭発表した内容を基に修正したもので



ある。日本語文法研究会では、鈴木重幸氏、鈴木康之氏、鈴木泰氏、松本泰丈氏など多くの先生方から貴重なご意見を頂いた。

## 言語資料・作品

- 『伊豆の踊り子』川端康成著 林栄一訳「日本近代文学選二」1984-3  
『城の崎にて』志賀直哉著 丘久安訳「日語学習と研究」1983-5  
『入れ札』菊地寛著 丘久安訳「日語学習と研究」1985-1  
『胡桃割り』永井竜男著 丘久安訳「日語学習と研究」1984-5  
『走れメロス』太宰治著 林栄一訳「日本近代文学選二」1983  
『遠い園生』辻邦生著 陶振孝訳「日語学習と研究」1987-6  
『夏みかん』壺井栄著 雷定平訳「日語学習と研究」1984-2  
『みかん』芥川竜之介著 任犹竜訳「日語学習と研究」1983-5  
『家族旅行』なだいなだ著 陳小隋訳「日語学習と研究」1981-1  
『たけ』太宰治著 焦同仁訳「日語学習と研究」1983-4  
『水』佐多稲子著 冷明訳「日語学習と研究」1984-1  
『高野聖』泉鏡花著 文浩若訳「日語学習と研究」1988-3  
『石を抱いた木』水上勉著 陶振孝訳「日語学習と研究」1984-5  
『おじさん、“寒いね”』西尾実 韓進旺訳「日語学習と研究」1979-1